

「互いに愛し合おう」

ヨハネの第一の手紙 第4章 7節a

説教 岡村 恒牧師

「愛する者たちよ。わたしたちは互いに愛し合おうではないか。愛は、神から出たものなのである。」(7節)ヨハネの手紙全体のクライマックと言われる御言葉の冒頭部分が、主の年2016年の標語として与えられました。

「愛する者たちよ」と7節、11節で繰り返し呼びかけられ、さらに、「互に愛し合う」ようにと力強く招かれています。ところが私たち自身を振り返っても、人間の歴史全体を見ても、私たちは互いに愛し合うことに失敗を重ねて来ました。結婚式でしばしば朗読される《愛の賛歌》(コリント人への第一の手紙13章)を目にするだけで、私たちには真実の愛が欠けていることを思い知らされ、絶望します。

昨年、「わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である」(ヨハネによる福音書 15章5節a)という主イエスの言葉に励まされて歩きました。自分自身が主につながり合われていることを喜ぶだけでなく、主につながる他の枝を知り、共に生きていくことを喜び、主に感謝しました。そして今、愛し合うことに繰り返し失敗しながらも、「愛は神から出たものである」という力強い宣言に捉えられています。愛は神から出たものであり、私たちは神に愛され、生かされている者だと、という宣言に慰められます。

標語聖句に続く部分には、さらにこう記されています。「…神は愛である。神はそのひとり子を世につかわし、彼によってわたしたちを生きるようにして下さった。それによって、わたしたちに対する神の愛が明らかにされたのである。わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して下さって、わたしたちの罪のためにあがないの供え物として、御子をおつかわしになった。ここに愛がある。愛する者たちよ。神がこのようにわたしたちを愛して下さったのであるから、わたしたちも互に愛し合うべきである。」(8節b～11節)

神は愛である、神が愛を明らかにして下さった、神が愛して下さった、神が御子をおつかわしになった。ここに記されているのは神が主語の文書です。神が、私たちのためにいったい何をして下さったのかが記されているのです。「神がこのようにわたしたちを愛して下さった」のだから《私たちは互いに愛し合う》ことができるのだと言うのです。

私たちが互いに愛し合うことの前に、まず、神が主語であられることを心に留めましょう。

私たちは、神がこの私を愛して下さったということをも確認します。神が私たちを愛して下さり、神が私たちのうちに留まっていて下さることの恵み深さを味わい知るのです。

神がまず私たちを愛して下さった、ということは、あの十字架の上で、最も激しい仕方でも明らかにされました。私たちの罪を赦し、私たちを主イエスというぶどうの木につなぎ合わせるために、主イエスは血を流し、肉を裂かれて、その命を与え尽くして下さいました。神に捨てられる死の絶望までも、私たちに代わって味わい尽くして下さいました。「神はそのひとり子を賜わったほどに、この世を愛して下さった。それは御子を信じる者がひとりも滅びないで、永遠の命を得るためである。」(ヨハネによる福音書 3章16節)という言葉は真実です。

神の愛し方は、具体的でした。ひとり子を十字架にかけて「あがないの供え物」にするほどに具体的でした。ですから、私たちもまたお互いに、具体的に愛し合うようにと招かれています。私の隣りに居る人も、主イエスが命を与えてまで愛し抜いて下さった人です。もう既にそのことを知り、信じて洗礼を受けた人もいます。まだこの真実を知らず、主の命を受けていない人もいます。しかし、そのひとりひとりを、神がまず愛して下さったのです。

クリスマスの知らせは、《すべての人の喜び》と呼ばれます。神の愛はすべての人を包み込んでいます。その中から、聖霊の助けを受け入れて、招きに応える人が生み出されてきました。私の隣り人を神は愛しておられます。この人と一緒に、私たちも神の愛を受け止め、お互いに愛し合って歩む時、私たちは神の喜びと一緒に味わうこととなります。

私たちが神を愛さず、いや、神を全く知らない時に、まず神が私たちを愛して下さいました。しかも、ひとり子主イエスを与え尽くすという仕方でも、その愛を具体的に、完全に表して下さいました。ここにこそ、ここにだけ神の愛が明らかにされています。

主の食卓を囲む神の民のただ中に、今も神は留まり続け、私たちのうちにその愛を完成して下さいます。これは、私たちの願いなどではなく、神に愛されている者ひとりひとりにお与え下さった、神の確かな約束です。

(記 岡村 恒)